

第 26 号
 月 1 回 発 行
 ひの心を継ぐ会
 〒799-1336
 住所: 愛媛県西条市
 上市甲 720-1

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

お知らせ

新型コロナウイルス感染症の流行が拡大している状況を受け、参加者の健康と安全を最優先に考慮し、第三回定期総会並びに「近藤美佐子先生を語る会」の開催を中止することといたしました。総会資料は、月報六月号にてご確認ください。よろしくお願いいたします。

神道(八)(大和世界の建設)
 古事記
 宇宙の創始
 — 有って有る者 —
 竹葉 秀雄

旧約聖書では、出エジプト記第三章十三—十五にこう記している。

モーゼは神に言った。「わたしがイスラエルの人々のところへ行つて、彼らに『あなたがたの先祖の神が、わたしをあなたがあたがたのところにつかわされました』と言うとき、彼らが『その名はなんというのですか』とわたしに聞かざれば、なんと答えましょうか。』神はモーゼに言われた。「わたしは、有って有る者」。また言われた。「イスラエルの人々にこう言いなさい。『わたしは有る』というかたが、わたしをあなたがあたがたの

ころへつかわされました」と。神はまたモーゼに言われた。「イスラエルの人々にこう言いなさい。『あなたがたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主が、わたしをあなたがあたがたのところへつかわされました』と。これは永遠にわたしの名、これは世々のわたしの呼び名である」と。

彼等の神の名は、永遠に「有って有る者」が本当なのである。「有って有る者」とは、当然なるもの、自から然るもの、他から支配を受けざるもの、作為なきもの、宇宙の根元なるもの、神ながらなるものである。

創世記の第一章にある、「はじめに神は天と地とを創造された。地は形なく、むなく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。神は「光あれ」と言われた。すると光があつた。神はその光を見て、良しとされた。云々」以下、天地創造の所の神は、意志を持つ神となり、後にユダヤ民族を撰ばれた民とする神となり、他の物を礼拝するを許さぬ嫉妬の神となるのであるが、それは、ユダヤ民族が本来の神を独専し誤らしめたのであつて、本来は「有って有るもの」、宇宙的なる自ら然ある存在を見ていたのである。自ら然るものに「意」があるかの問題は後に「理気論」に於て詳しく述べるが、理法を意とすれば意志があることになり「光あれと言えは光あり」となる。この時の「言えは」は宇宙意志の方向である。それは新約聖書に於ては「言^レ」となる。

第三章 農民生活の倫理的考察

菅原 兵治

第二節 批判

騷激的態度

次は瀆武の騷激的態度である。之は前述の如く社会の罪惡的諸相に憤激し、熱弁して立てる者にして、其の意気は確かに壮とするに足るものがある。然し此等の人々に対して最も物足り無さを覚ゆることは、社会の罪惡を發見し指摘する對他の興奮は有するも、靜かに内省的な修己的努力を欠くことであり、又現代社会の否定破壊に熱狂して、矯激なる言行を敢えてなすも、其後に施すべき真にして且新なる経綸も、之を培うべき深き哲学も、毅い道徳も裕かなる風流も無いことである。王陽明が「不騷、不激、不競、不惰」という四不訣を遺しているが、真箇の社会改革などということは、そう病的に興奮して、騷ぎ過ぎたり、激し過ぎたり、競い過ぎたりしたのでは決して大成するものではない。もつと重厚であり剛毅であるべきものである。殊にも農村内に於けるそれに於て然るものがある。

然るに農村に於ける之等の人々を見るに、或種の煽動に乗ぜられて之に従つては電気人形のように勇敢に踊り爆弾の如くに狂暴に爆発する。彼等の荒野の雑草を焼拂う猛火の「力」に対しては敬意を表することを惜まぬが、焼拂つた後に下ろすべき新しき種子と、之が肥培の経綸とを有せぬ点を遺憾とする。其の彊き力は敬すべきも、其の義の足らざるを憾む。然かもこれらの人々が現代社会に於て相当勢力を有するを見るも、已に現代世相の世紀末的状态にいたれるを知ることが出来るであろう。然かもかかる時勢に於ける勢力が一時的に如何に有力なる地位を占むるも、決して永久的存在性無き所以のものたることは、第二章の歴史的過程の事實に於て証せらるることであろう。然し私共は決して此の「力」を否定してはならぬ。苟くも彊義的態度を理想とする農士は、一面深き「義」的修練を積むと共に、一面また之等の人々に劣らぬ強き力「彊」を持つることを怠つてはならぬ。

民を農に帰す

三浦 夏南

こんな話がある。経済的余裕を手に入れた時、最終的に何を望むかという調査に対して、多くの人が答えたのは、美味しい物を食べ、心地よい所に住み、日常に時間的余裕を持って、家族と仲良く暮らし、時々旅行に出かけるというある意味平凡な回答であった。人は自由を奪われている時には、その反動で現実離れた願望を抱くこともあるが、実際に自由を手にして見ると、過度な贅沢は却って苦痛となり、平穩な日常を求めるようである。連日高級店でお腹一杯に食べると翌日苦しくなるし、広い間取りの高層マンションは広すぎて寂しく、旅行も行き過ぎれば、必ず飽きが来るものである。贅沢は日常の中に訪れる非日常であつて初めて喜びとなるもので、頻繁に行うとそれは苦痛である。さらに注目すべきは、自由になるまでは他に先じて努力研鑽し、その道に頭角を現さんと走り続けた人々も、ある到着地点まで来てしまえば、平穩な日常を願うもので、際限のない野心は異常なものであるようだ。

少し考えてみると、これらの穏やかなる日常は、近代化以前の自治村には当たり前の事であつたように思える。家族とともに働き、与えられた恵みはこの世で最も美味なる食事であり、祖先の靈の宿る職住一体の日本家屋は住みやすく、自らの足や、馬にて辿る旅路は風情に満ちたものであつたに違いない。自治が解体されるが、彼らが必死に掴もうとする自由の先にあるものは、過去に当然の如く日本人に与えられていた生活であつたとは皮肉であるが、近代というものの本質かもしれない。教育では、倫理を壊しておいて、道徳を教える。医療では健康を壊しておいて、薬を作る。農業でも、虫や病に侵されやすくしておいて、農薬を作る。全ての分野に於て同じことが言えるであろう。

多くの善良なる日本人にとって、自覺的に気付かれていないかもしれないが、理想とするところの自由は、我々の心の深層に潜む農的生活の記憶なのではないかと思う。しかしこの理想的生活に人々が帰ることはあまりにも難しく、それは理想であつても実現可能なことではないであろう。先の設問が、経済的余裕を既に持っている人々に対して行われたものであることからそれ分る。皮肉なことには都

市的競争に勝利し、自由の一端を手にしたものにして初めて分ることなのである。しかしこれではいけない。真に農的生活に安んずるべき人々は経済的自由を手にすることなく、日々懸命に労働者として働く人々なのである。斯くの如き人々は農に自ら帰ることは出来ないかもしれないが、農へと民を帰す先導者が出現すれば、水が上から下に流れるように挙って大地へと帰るに違いないのである。つまり閉塞し、窒息する近代的都市生活に風穴を開ける戦国の雄の存在が求められるということである。

明治の近代化以後、表面的に日本は変わり続けて来た。人の心も大きく変わってしまったかのように見える。しかし、その内奥をよく窺えば、日本人の本質は全く変わっていないように思う。然るべき道を開拓すれば、民は必ずその好むところに帰るのである。後は道を切り開くものの実力如何に依るのである。日々隠れたるところに研鑽を積み、来るべき日が来るまで勉強と実践を繰り返さねばならない。

とよくも農園だより

三浦 美恵

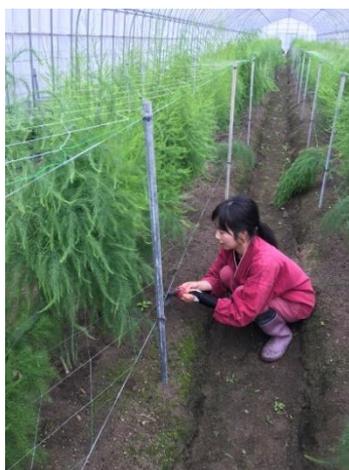
今月はネギの収穫、アスパラガスの手入れ、春野菜の手入れ、夏野菜の播種・定植、里芋の土あげ・芽出しを行いました。

まずビニールハウスで育てているネギについてです。苦労したハウス栽培でのネギでしたが、無事立派なネギが育ち、毎日収穫しては近くの青果会社に出荷をしています。新型コロナウイルスの影響で、スーパーで野菜の需要が高まったり、反対に学校が閉校の為給食の需要が下がったりと、経済状況を受けて日々値段が変化しています。他の畑で育てていたネギも徐々に大きくなってきているので、様子を見て順番に出荷していく予定です。

続いてアスパラガスについてです。葉は大きく茂り、昨年の秋に定植した時には三十 cm ほどだった株が、大きいものでは二 m を超えるまでに生長しています。昨年はまだ茎も細く、爪楊枝程度でしたが、今や親指程の太さのものも芽を出し、野菜の生命力に感心せずにはられません。

続いて春野菜の手入れです。カブ、大根、レタス、キャベツ、ブロッコリーが採れ始め、特に今はキャベツやブロッコリーを食べにくる青虫と戦っています。昨年のこの時期は初めての大規模ケール栽培を行い、青虫退治と収穫に奮闘していました。初めて手袋越しに青虫を掴んだ時の感触は忘れられない程気持ちが悪く、またその虫を自ら駆除することに罪悪感を覚えていました。しかし慣

れとは恐ろしいもので、今では何とも思わず一日に数十匹の青虫を退治していま



す。トウモロコシや枝豆、ジャガイモ、ニンジン、白菜も少しずつ大きくなってきているので、毎回畑を覗きに行くのが楽しみです。

次に夏野菜の播種・定植です。購入したトマト、ピーマン、キュウリ、ナス、シソ、ズッキーニ、ゴーヤの苗を、最近完成した庭のミニ菜園に定植しました。また、種からハウスで育てていたトマト、ピーマン、ナス、キュウリ、ズッキーニ、シソ、白菜も、大きくなったものから菜園に定植しています。他にもトウモロコシ、ゴマ、小松菜の播種も行い、先月まで駐車場だったスペースが今や野菜で賑わってきています。

最後は里芋の土あげ・芽出しについてです。土あげとは、定植した里芋の畝間を管理機で走り、畝の上やマルチの横に土を飛ばすことで、里芋にしっかりと土が被さり、見た目にも綺麗な里芋が育ちます。また、植穴とマルチとの間に隙間ができ、出て来た芽がマルチで焼けてしまうことを防ぐとともに、マルチの押さえを強化し、春風に飛ばされることを防ぐ意味もあります。全畑の土あげが終わった今、むくむくと出始めている芽を確認し、植穴からずれて出てきている芽の上のマルチを開ける作業を朝一番の仕事として行っています。少しずつ里芋が芽を出している今、これからの里芋の生長が楽しみです。



★今後の予定

来月も、今月に引き続き勉強会は休止致します。復帰の目途が立ちましたら、本稿にてご連絡差し上げます。

★一燈照偶 万燈照園

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

- ・ 一般会員 三千元
- ・ 賛助会員 一万円
- ・ 特別賛助会員 三万円
- ・ 支援会員 一万円

